慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	グレゴリウスにおけるハルトマンの人間観
Sub Title	Hartmann's view of man in Gregorius
Author	大橋, 修子(Ohashi, Nobuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.72- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

グレゴリウスにおけるハルトマンの人間観

大橋修子

ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴリウス」は聖徒物語の色合いをおびた完教小説である。全体としては、神のみならず悪魔の存在をも認め、人間世界をこの両者が相争う場と看なし、人の行く道を一方は天国へ、他方は地獄へ通じる道と分ける二元論的思想が支配しているが、ハルトマンは「直実を描くため」(三六行)にしばしばその見地を変える。ハルトマンの意図は完教的なところにあるのだが「グレゴリウス」に描かれたものは結局、人間である。すなわち当時のキリスト教思想に色どられてはいるものの、時代を越えて通用する人間の生そのもので、そこに扱われる問題は実存の問題と云ってもさしつかえないのである。ハルトマンの人間観は、我々地理的にも時間的にもヨーロッパの中世キリスト教世界から遠い日本人には理解するのが困難のようであるが、しかしそれだけにそれを探ってみる意義もあるように思う。そこで「グレゴリウス」における彼の人間観を、「罪」、「人間社会における善なるもの」と云う点から考察してみたいと思う。

罪について

「グレゴリウス」全体を主題として流れる思想は人間の犯した罪に対する後悔と神の恩ちょうとの関係である。すなわち、人間は誰

しも原罪を負って生まれて来るのであるから自らも罪を犯す可能性をもっている。しかし罪を犯した時、神から見捨てられたものと嘆いたり、神の恩ちょうを疑ったりしてはならない。神の救いの力を信じて心から悔い改めればどんな大罪も必ず許される。許され難い罪は神の広い心を疑い絶望して自ら地獄におちる（六六行以下）と云う点にある。その思想を具現するものとしてグレゴリウスの生が描かれるのであるが、さて罪とはどう云うことであろうか。

神学的見地からすれば、人はその犯すすべての罪に対して、すなわち無意識にそれと知らずに犯す罪に対しても責任があって、知らずに犯したのだから無罪と云うことは許されない。中世にあっても神が自らに似せて創ったと云う人間には意志の自由、選択の自由と云うものがあった。すなわち地獄におちるか天国への道を選ぶかを決定するのは人間の自由意志に任されており、悪魔の誘惑による原罪をはじめとしてすべての罪はそれを犯す人の意志によって起こると云うのである。罪は悪魔の誘惑によるものではあるが、人はそれを犯さないと云う道を選ぶ自由、又はそうすべき責任があると云う考え方で、従って罪を犯した時はいかなる場合でもその罪に関して有罪であるとする思想がキリスト教にある。それは原罪を負って生まれて来る人間の宿命でもある訳であるが、ハルトマンは「グレゴリウス」の中で罪を犯す兄妹、母子をどんな風に描いているだろうか。

まず三百四行で「世の中の敵」と云う云い代えで幸福な兄妹を嫉む悪魔が登場する。三百五行以下で、悪魔は高慢と嫉妬のために地獄におとされた者と定義される。そしてこの世に良い事があると云うことがいつも悪魔には不快でその良いことをだめにするためにならら悪魔は執念深い根気を発揮すると、悪魔のこの世における働きが述べられ、引き続いて「だから悪魔は彼ら兄妹の倖せをなんとかして不幸に変えようと思った」とあってその兄に対する誘惑が少しずつ遠まわしに描かれはじめる三二三行以下。兄が「妹と交る」mit siner swester slâfen. 331 ことを考えるようになった原因が数えあげられるのだが、ここで最も興味深いのは、その中に「悪魔の傲慢」stiuvels hoene, 326 と共に兄の「子供っぽい無分別」sin kintheit, 327 がこの人間（兄）を中にして悪魔と争ったとあることである。それは作者の洞察力の鋭どさを表わすと同時に、彼のこの兄に対するほのかな同情の念をも表わしてはいないだろうか。すなわちこの大罪を前にして海千山千の悪魔と渡り合うのは頼りなげな子供なのである。三三一行の「妹と交る」と云う言葉が心理的なきっかけとなって作者は嘆きの声をあげる。

wâfen, herre, wâfen　　332
über des hellehundes list,
daz er uns sô gevaeric ist!
war umbe verhenget im des got
daz er sô manigen grôzen spot
vrumet über sin hantgetât
die er nâch im gebildet hât?　　338

あゝ主よ、おゝ、地獄の犬の奸計がこれ程に術策長けたものであろうとは！　御身に似せて創られた人間にこれ程多くの嘲笑をあびせるのを神はなぜ悪魔に許されるのであろうか？

それは非常に主観的な我を忘れたと云わんばかりの嘆きであるが、その難きのむけられる対象は兄ではなく神である。すなわち、神は自らに似せて創った人間に対して悪魔がかくも大それた嘲笑をあびせるのを何故悪魔に許されるのだろうとあるだけで、この兄に対する断罪の声はあげられないのである。兄の考えを三四十行で「この大罪」dise grôze missetât と名づけて作者は批判の念を明かにするが、その言葉には「悪魔の助言によって」と説明があり、続く文では妹に「おさない女」daz einvalte kint 345 「純粋な愚かさ」diu reine tumbe 347 の言葉があてられ、だから彼女は適切なふるまいが出来なかったのだと妹の立場を説明する。そして三五一行以下では悪魔はこの二人をもう決してのがさなかったと続くのである。

nû begap si der tiuvel nie　　351
unz sin wille an in ergie.

今や悪魔はその意志がふたりの上に起るまでふたりを決して離しはしなかった。

この三つの言葉にはハルトマンの批判すると同時にこの兄妹に同情を寄せる気持がよく出ているように思う。ハルトマンは更に、罪を犯さんとする兄を「愚かなる者」der unwise 357 と名づける。そして近親相姦の場面の前後に悪魔の名を der tiuvel 374 tiuvelschünde

400 あげることによってそれがそもそも悪魔の誘惑によって起ったものであることが強調される。

この兄妹の場合は罪の行為であることが最初から（二人にとっても）明らかであるので聴衆の早計な判断が彼らにくだされる怖れが多かったためだろうか、後のそれと知らずに行なわれる母子の結婚に比べて（ちなみにここでもそれは悪魔の意志によって起こった二二四六行とある）、大変ていねいに描写あるいは説明がされている。三百三行からすでにこの罪について叙述がはじめられたと見て良いと思うが、最初はぼんやりと浮んだ考えが次第に具体的に明らかになって来ると云う兄の心の動きの経過をそのまゝにたどるその方法は、ていねいな分析的描写とも相俟ってそれなしには起こり得たかも知れない聴衆のこの兄妹に対する、あるいはその事実に対する嫌悪感のようなものをのぞき、早計に拒否してしまう気持をあらかじめ鎮めるような役割を果たしているようである。そして同時に作者のこの兄妹に対する気持、あわれみ同情する気持と行為そのものに対する批判がよく出ているように思う。ハルトマン兄妹に対する気持は人間としての、いわば共通の宿命を負った者としての同情に基づいており、そしてその罪を批判する時は彼は神学上の見地に立つのである。しかし神学的には人はその犯した罪に対して責任があり、すべての罪は罪人自身の意志によって行われるものであるとは云うものの、ハルトマンは「グレゴリウス」中で、罪の場では常に悪魔の意志によって、悪魔の誘惑によってと云うことを前に強く押し出そうとする。それは彼の罪人たちに対する同情にもよるのであろうが、罪悪そのものに対する、あるいは罪悪がこの世に存在し得ると云うことに対する彼の嘆きがそれを批判する気持よりも大きいからであろうと思う。兄妹相姦のあとで、そう云う事は誰にも起こり得ることである（一四五行以下）と冷静に、多少の教訓的な意図ももって一般論を述べているのもそう云う意味で興味あることである。

nû si gewarnet dar an 415
ein iegeliche man
daz er swester und niftel si
niht ze heimliche bi:
ez reizetz ungevierę

daz man wol verswiere.　　420

さて、誰しも人は妹や姪とあまりに親密になりすぎぬようこころしなければならない。

そう云うことは人がおそらくやめておいた方がよい不都合を起させるものだ。

兄妹の場合に比べて母子の結婚の描写は簡潔であると先にも述べたが、この場合は二人の心の状態よりも外面的な客観的事態が二人をそこまで追いやることが理路整然と描かれる。母である女王は臣下の勧めに従って結婚の意を固めるのだが、その経過を述べるハルトマンはこの臣下と同じ見地に立っていて彼女が我子と結婚しようとしているのを忘れたかのようである。そして結果を簡潔に彼女の選んだ相手はグレゴリウスで、こうして彼は自分の母の夫となった（二二四三行以下）と云うだけである。幸福な彼らの生活を描写していて、ふと短く作者の嘆き（二二五六行）が入る。

seht, daz ergie mit riuwen.　　2256

あゝ、しかし、それは後悔に終るのだ。

この二人の結婚は母子である事を別とすれば最も理想的なものとして描かれ、客観的必然性をもったものとしてそのいきさつは一般的説得力をもっている。

ところでこの二人は母子であるとは全然知らずに結婚することになっているのだが、初対面の時女王がグレゴリウスの着物に注目するところ（一九四二行以下）は何を意味するのだろうか。彼女はその着物が、かつてその子を海に流した時にそえた布と同じもので作られていることに気がついて、自分の苦悩を新たに想い起すのである。母子が互に好意を持ち合ったとある後で、それはイヴを誘わした同じ者（悪魔）の仕業であると作者の註（一九六十行以下）が入るのだが、作者はこゝではっきりと神学上の立場にあることを云いたいのだろうか、すなわち少くとも母には罪の予感とも云うべきものが少しはあったと作者は云いたいのだろうか。いずれにしても作者も彼女もすぐにこの着物のことは忘れてしまったかのようである。そして作者は何の予感ももたないグレゴリウスに対しては勿論のこと、母に対しても個人的な批判の非難がましい言葉をかけることをしないのは、先の兄妹に対する時と同様である。

以上が「罪を犯すことになる経過」を描くハルトマンの態度であるが、罪が罪として明るみに出た場合はどうであろうか、最初の、

すなわち兄妹の場合は罪を犯したことに気がついて破局が来るのではなく罪の行為が世間に公けになりそうになって破局を呼ぶのである。妹は兄に「私の肉体も魂も死んだ」と嘆く（四三六行）のであるが「貴方のために私は神を、そして又世間の人たちをも失ってしまった」（四四十行以下）と続く言葉が上に云ったことを説明する。二人の嘆きの中心はしかし人間としての存在論にではなく、むしろ名誉の失われることにあるようである。（四六一、五三一、五六四行以下）。兄妹の相談をうけた長老もごく一般的な、通り一遍ともとれる表面的実際的なざんげを忠告するだけで、そこには魂の根本にふれるような人間の存在にかゝわるような深刻な考察は見られない。すなわち、兄は聖地へざんげの旅に出るよう、妹はしかし止まって良き女王として人民に慈善を施すようと云うのがその内容である。後の母子の近親相姦が明るみに出た時に比べれば、この兄妹の苦悩は世俗的なものであり、長老の忠告も宗教的と云うよりはむしろ世俗的なものである。彼らの苦悩はまず最初はその世俗的な名誉が危機にひんしている所に原因があるのだが、二人が別れなければならない時になるとその栄誉を気にする心も、別離をしのぶことに比べたら何程のことでもなくなり、神を怖れる気持がなければ世の嘲りをも甘んじて受けたであろう（六三九行以下）と少し焦点がずれて愛の苦悩となるのだが、いずれにしてもその中心は世俗的なところにある。神を怖れる気持云々とあるのは、宗教的と云うよりはむしろ彼らがいかに別れを惜しんだかを強調するためであろう。兄妹は二人共、後の母子の場合に比べたら宗教的に罪の意識がうすく、その苦悩は世俗的なもの、つまり愛の苦悩であるとは云うものの、苦悩それ自体としては非常に重く深いものであり、この第一の破局は質こそ異なっても第二のそれに匹敵し得る重さがある。（ちなみに、兄は愛の苦悩に死ぬのである **und lac vor herzeriuwe tôt.** 852)。

さて、兄妹の苦悩が世俗的、つまり愛の苦悩であるのに対して二度目の、すなわち母子の場合は罪の自覚から来る苦悩で、その罪の意識には人を絶望に追いやるばかりの強さがある。グレゴリウスは事が発覚した時その嘆きを怒りと変えて神に向かう（二六一四行以下）。

richer got vil guoter, 2614
des hâstû anders mich gewert
danne ichs an dich hân gegert.
ich gertes in minem muote

nâch liebe und nâch guote:
nû hân ich si gesehen sô
daz ich des niemer wirde vrô,
wande ich si baz verbaere
danne ich ir sus heimlich waere. 2622

まことに慈愛ふかく力強き神よ、貴方は私の望みをお願いしたのとは違ったふうにかなえて下さった。私はそれを心の中で愛と善意をもって望んでいたのです。それなのに私はこんなふうに母に再会したのでこの再会を決してよろこぶことが出来ない。母とこんなふうに親密になる位だったら会わない方が良かったのに。

四三六行以下で妹の口を通して云われた思想（zwir tôt 436）が二六四五行以下では客観描写の形で深くほりさげられる。作者は、慰めと云うものの一切ないこれ程の苦悩を体験した人が一体どこにいるであろうかと反問して、二人の絶望的な状態を強調する。ほとんど同じ言葉の操返しにも（ein zwivaltiger tôt 2664）見られるようにこれは、最初の場合のヴァリエーション、はるかに深刻なものと発展したヴァリエーションである。しかし何故これが先の兄妹の場合よりも深刻でなければならないのだろうか。兄妹の場合は最初から兄妹であると分っていての罪であるに反し、この場合は母子とは知らずに犯した罪ではないだろうか。第一には、意識していたか否かはその罪の重さとは関係がないと云うことがある。第二に母子の場合には同じ罪が新たに重ねられたと云う点にその罪の罪それ自体としての深さがある。母は絶望して神に見捨てられたものと嘆くのであるが、先に怒りともつかぬ嘆きを神に向けたグレゴリウスは、神の恩ちょうから見離されたと絶望してはならない、神は真実の後悔をすべての罪をあがなうものとし給うのだからとなぐさめ忠告する。そして自らも世俗的栄誉をすべて捨てゝざんげの旅に出る。

ところでしかし、最も罪深い者として最も厳しいざんげを行うのは母ではなく、自らは責任のとりようもない両親の罪の結晶として生まれ、何も知らずに殆ど宿命的に新しく罪を重ねることになったグレゴリウスである。すなわち罪の結晶として生まれたと云うことでグレゴリウスのこの世における存在はすでにそれ自体として罪深いものである上に、その肉体は新たに罪を犯す原因ともなるのであ

るから、その点では母以上に罪深いものであり、一度は亡びなければならないものである。この一時的な破局は彼が生まれる由来も含めた彼の人生の、そもそも彼の実存の論理的な帰結である。一七年間の非人間的とも云える厳しいざんげによってグレゴリウスは自分の罪ばかりでなく両親の罪までつぐなうことが出来、神に召された人として法王となってローマに行くのである。罪人として描かれるグレゴリウスは「神の恵みから遠い者（der gnâdenlôse man 3130）と呼ばれるのだが彼には常に神の恵みが与えられているのである。たとえば彼が赤子として海に捨てられた時（九二九行以下）、あらゆる恵みを絶たれて（三一百四行）海上の孤島で過ごした一七年間（三一一八行以下、三一三四行以下）も神の恵みはグレゴリウスの上にあるのである。彼がすべての罪から許されるのは、常に神の恩ちょうの大きさを疑わなかったその信仰の強さによると云う事は明らかであるが、さて一七年間もの厳しいざんげを必要とした彼の罪はどこにあるのだろうか。そもそも彼が生まれたと云うところにあるのだろうか。ハルトマンはその明らかな答えを出してはいない。たゞ彼はグレゴリウスの生を人間一般の生の最も極端な例としてそこに描こうとしたのであろう。

世俗的社会における善きものについて

先に私は、ハルトマンが「グレゴリウス」ではしばしばその見地を変えると指摘したが、それは彼がこの世における人間の幸福について描く場合にも云えると思う。私がこゝで云う幸福とはもって生まれた身体の美しさ、総明さそれに社会的な地位の高さなどのことである。すなわちそれは人間社会における善き事どもである。幸福であると云うことは中世世界にあっては世俗的な意味で良いばかりでなく、宗教的見地からもそれはその幸福な人間に対する神の愛の表われとして是認されている。神の愛を求めることとこの世における幸福を追うこととは同一であると云う当時の騎士の生活信条もそこに根ぎょがあると云える。幸福な人間には讃美される価値が云わば一般宗教道徳的にも存在していたのである。しかしハルトマンは人間の幸福の要素となるものを描く場合、必ずしも常に上記の一般的見地に立つのではなく、時に全く異なった立場でそれらを観察するのである。ハルトマンはどこで、又どのようにその立場をかえて幸福の諸要素を扱うか考察してみたいと思う。

兄妹の美しさはまず二百三行以下で一般的見地から讃美の対象となるのだが、三二五行では兄に罪を犯させる一つのきっかけとなるものとして、その妹の美しさが数えあげられる。

Daz eine was diu minne　323
diu im verriet die sinne,
daz ander siner swester schoene,
daz dritte stiuvels hoene,
daz vierde was sin kintheit
diu ûf mit dem tiuvel streit
unz er in dar ûf brâhte
daz er benamen gedâhte
mit siner swester slâfen.　331

兄の理性をそそのかしたのは第一に愛情であった。第二に妹の美しさであった。第三に悪魔の嘲笑であった。第四に彼の子供っぽい無分別であった。それが兄の心の中で悪魔と争って遂には悪魔は彼を事もあろうに妹と交ることを考えるところまで追いやった。聴衆はそこでハルトマンの洞察力の鋭どさに気づくと同時に、肯定的なものと看なされて来た人間の身体の美しさに従来とは異なった面のあることをそこに見るのである。元来は善いことである愛情（minne）もこゝでは罪の契機として第一に数えあげられるのである。そして又、兄妹相姦の場ではそこには愛情の行きすぎがあったと、本来は肯定的な triuwe と云う言葉が否定的な意味をもつものとして用いられている（三九六行）。神がこの世に与えた最善のものである結婚（二二二二行以下）が、こゝでは罪の場となり悪魔の意志で行われるのである（二二四五行）。「神の騎士」gotes ritter 1534 になり世間の栄誉をかく得して自分に対する神の愛の証しを見ようとするグレゴリウスが幸福の絶頂で見出すものは神の愛のしるしではなく、罪を犯した自分である。すなわち「グレゴリウス」にあっては元来は善いことである人間の幸福の諸要素となることが神によるものとしてほめたゝえられるばかりでなく、罪の行われんとする時に（兄妹の場合）、又罪が行われたあとでその原因の一つとして指摘される。そして罪が、本来は神の愛を求めることと同義であるはずの世俗的名誉を追ったことの必然的帰結として行われたりする（グレゴリウスの場合）のである。

興味深いのは、罪人としてざんげの旅に出たグレゴリウスの身体の美しさが――その身体は限りもなく罪深いものなのであるが――讃美する者を通してゞはなく、漁夫の嘲笑と云う形をとってしかもいともていねいに描写されることである（二九百六行以下）。すなわち漁夫はそんな粗衣をまとっていてもお前の美しい手入れの行きとどいた身体を見れば巡礼なんてまやかしであることがすぐわかる。詐欺師めとののしって、こまかくグレゴリウスの身体の美しいことをあげつらうのである。又、後にローマからの使者が海上の孤島でグレゴリウスを見出した時、彼が美しい顔色でこれから踊りに行く人のようによく手入れの行きとどいた服装をして輝くばかりの美しさであったのではないと（三三七九行以下）、最後には否定してしまうのに、ことこまかに美しいグレゴリウスを描いてみせるのは身体の美しさに対する作者の考え方を表わすと云うよりは、一種の皮肉な遊びなのであるがしかし続いて、使者が発見した現実のグレゴリウスの身体がすべての罪をあがなって今や見るかげもなくやせおとろえた様を描く時はまじめな調子にもどる。

だがハルトマンはこの作中で人間の身体と云うものを悪の場として宗全に否定し去るのではない。彼は物事のそう云う否定的な面を臆するところなく描きはするが、その肯定的な面までも否定し去ることはない。例えば人間の身体の美しさについても、それが罪の一つの契機となったと云うだけでそれ自体に対するそれ以上の批判的な言葉は見られないのである。事実だけが明らかにそこに描き出されるのである。善い事はあくまでもそれ自体善い事なのである。そしてたゞその善い事が罪悪の契機となり得ると云うところにハルトマンの嘆き（たとえば三三三行以下）の本質があり、又その事実がこの作品全体の調子を決定しているのである。すなわち人間の生の宿命のような、業のようなものに対する作者の嘆きが一方にあり、同時にしかし人間は根本的には善きものであって常にその宿命から救われる可能性を持っていると云う考えがこの嘆きの作品に明るい、少し楽天的な調子をも与えているのである。それは生まれた時すでに赤ん坊のグレゴリウスに与えられる言葉「善き罪人」（六九一行）にも良く出ている。そして更にこの元来は遠い二つの言葉の皮肉な組み合せには、ハルトマンの嘆きと同情と希望をない混ぜした人間観がよく出ていると思う。

以上の考察に際してテキストには左記のものを用いた。

Hartmann von Aue: Gregorius. hrsg. von Hermann Paul, Altdeutsche Textbibliothek Nr. 2, Neunte Aufge. Tübingen 1959.